



リオデジャネイロパラリンピック帯同報告

著者	加藤 秀治
雑誌名	佐野短期大学研究紀要
号	28
ページ	127-132
発行年	2017-03-31
URL	http://doi.org/10.15109/00000100

リオデジャネイロパラリンピック帯同報告

Coaching Rio de Janeiro Paralympic Report

加藤 秀治*

Shuji Kato

Abstract:

This summer, the present writer had an opportunity to attend the Rio de Janeiro Paralympics with Japanese national team of track and field as outside support staff (coach) and will report the details here.

The Paralympics this year was held in Rio de Janeiro, Brazil and the schedule was for 12 days from September 7th to 18th. In the men's T42-47class 4x100-meter relay, we won a medal for the first time in Paralympics track and field as Japanese team.

The Olympics/Paralympics will be held in Tokyo in 2020. The sport for the physically handicapped will gather more attentions from now on in Japan.

I would like to contribute back the experience gained through Rio de Janeiro Paralympics to support activities for the Tokyo games in 2020 even a little.

キーワード:

リオデジャネイロパラリンピック、障がいクラス、視覚障がい、肢体障がい、知的障がい

1. はじめに

今夏、筆者は村外支援スタッフ（立位コーチ）としてリオデジャネイロパラリンピック日本代表選手団陸上競技チームに帯同する機会を得たので、その内容を報告する。

パラリンピックとは国際パラリンピック委員会（IPC）主催の競技大会で4年に1度開催される、障がい者スポーツでは最大規模の競技大会である。

今年のパラリンピックは9月7日から18日まで12日間の日程でブラジルのリオデジャネイロで開催された。リオデジャネイロはブラジルの南東部に位置し、人口規模ではサンパウロに続く第2の都市である。大会期

間中の気温は25℃前後を推移したが、ある日は35℃を越すような非常に気温の高い日もあった。

競技運営は午前と午後のセッションの2部構成で実施された。午前のセッションは10時から13時までの間で行われ、午後のセッションは17時半から21時までの間にレースが行われた。

今回でパラリンピックは15回目の開催となり、新種目を含めて、22競技・528種目が実施された。今回のパラリンピックには世界159か国の選手団に加え Independent Paralympic Athletes チーム（以下、IPA チーム）が参加した。この IPA チームとは難民と亡命

*佐野短期大学 総合キャリア教育学科 Sano College Senior Lecturer

者によって構成されるチームであり、今大会から初めて参加をすることとなった。(IPC、online1) パラリンピック全体の参加人数は4,316名で内訳は男性2,647名、女性1,669名である。(IPC、online2)

日本からは230名(選手132名、競技パートナー15名、競技団体役員・コーチ65名、本部役員18名)の選手団が参加した。(日本パラリンピック委員会、online3) また、選手団以外に筆者のように各競技の連盟などから派遣された村外支援スタッフ33名が帯同した。

この内、筆者が村外支援スタッフ(立位コーチ)として帯同した陸上競技チームの参加人数は、63名(選手36名、競技パートナー10名、選手団スタッフ17名)であった。陸上競技の村外支援スタッフは4名が帯同した。

表1は出場した選手の一覧であり、この中の障がいクラスの数値は各選手の障がいの程度を表している。例えば11から13までは視覚障がい選手のクラス、20は知的障がいの

選手のクラス、34は車いすを使用しなければいけない脳原性麻痺がある選手のクラス、42は大腿切断(膝離断含む)と片膝離断または片大腿切断と同等の他の機能障がいを持つ選手のクラス、44は片下腿切断または片足関節の機能を有しない選手のクラス、46は上肢形態異常、上肢の他動可動域制限または、上肢の筋力低下の片側の最小の障がい基準を満たす片側上肢障がい選手のクラス、47は上肢切断および形態異常、上肢の他動可動域制限、または上肢の筋力低下の片側の最小の障がい基準を満たす片側の上肢障がいの選手のクラス、52から54は頸椎損傷、脊椎損傷、切断や機能障がいによる車いす選手のクラスを表している(日本パラ陸上競技連盟、online4)。それぞれの障がいクラスにおいて各種目が行われるため、競技運営は非常に細分化されているといつてよいし、障がいクラス毎に競技水準や求められる身体動作が異なっている(近藤、2013)。数字の前につい

表1 出場した選手の一覧

男子 氏名	所属	障がい クラス	出場種目		
			1	2	3
和田 伸也	賀茂川パートナーズ	T11	1500m	5000m	マラソン
岡村 正広	RUNWEB	T12	マラソン		
堀越 信司	NTT 西日本	T12	マラソン		
山口 光男	パーパス株式会社	T20	走幅跳		
山本 篤	スズキ浜松アスリートクラブ	T42	100m	走幅跳	4×100mR
佐藤 圭太	トヨタ自動車株式会社	T44	100m	4×100mR	
鈴木 徹	SMBC 日興証券株式会社	T44	走高跳		
芦田 創	トヨタ自動車株式会社	T47	走幅跳	4×100mR	
多川 知希	AC・KITA	T47	100m	4×100mR	
上与那原寛和	SMBC 日興証券株式会社	T52	100m	400m	1500m
佐藤 友祈	WORLD-AC	T52	400m	1500m	
野田 昭和	鳥取パラ陸上競技協会	T52	400m	1500m	
大井 利江	北海道・東北身体障害者陸上競技協会	F53	砲丸投		
松永 仁志	WORLD-AC	T53	400m	800m	
久保 恒造	株式会社日立ソリューションズ	T54	5000m	marathon	
副島 正純	一般社団法人ウィルチェアアスリートクラブ ソシオ SOEJIMA	T54	マラソン		
永尾 嘉章	ANAORI A.C	T54	100m	400m	
樋口 政幸	ブーマジャパン株式会社	T54	800m	1500m	
洞ノ上浩太	ヤフー株式会社	T54	マラソン		
山本 浩之	Team Heart Space	T54	マラソン		

女子 氏名	所属	障がい クラス	出場種目		
			1	2	3
高田 千明	ほけんの窓口グループ株式会社	T11	100m	走幅跳	
近藤 寛子	滋賀銀行	T12	マラソン		
西島美保子	日本盲人マラソン協会	T12	マラソン		
道下 美里	三井住友海上株式会社	T12	マラソン		
蒔田沙弥香	日本知的障がい者陸上競技連盟	T20	1500m		
山本萌恵子	日本知的障がい者陸上競技連盟	T20	1500m		
北浦 春香	株式会社アシックス	T34	100m	400m	
高松 佑圭	堺ファインズ	T38	100m	400m	
大西 瞳	ヘルスエンジェルス	T42	100m	走幅跳	
前川 楓	チーム KAITEKI	T42	100m	走幅跳	
高桑 早生	エイベックス・グループ・ホールディングス株式会社	T44	100m	200m	走幅跳
中西 麻耶	うちのう整形外科	T44	100m	走幅跳	
辻 沙絵	日本体育大学	T47	100m	200m	400m
木山 由加	エイベックス・グループ・ホールディングス株式会社	T52	100m	400m	
中山 和美	アクセンチュア株式会社	T53	400m	800m	1500m
土田和歌子	八千代工業株式会社	T54	マラソン		

出所：Online3 より筆者作成

ているアルファベットの T はトラック種目と跳躍種目を表し、F は投擲種目を表す。

II. アメリカでの事前合宿

今大会では各々の競技日程の関係で、日本選手団は複数のグループに分かれて出国した。陸上競技チームでは各グループで出発前日に成田空港近郊のホテルに集合し、翌日のフライトに備えた。そして時差調整を目的として、ほとんどの選手は経由地のニューヨークで事前合宿を行い、その後ブラジルに入国した。今回の事前合宿はニューヨークにあるセント・ジョセフ大学の競技場とその近郊の

ホテルを使用した。(写真1)

この合宿は本番前の調整合宿であるため、選手の日々の体調を踏まえて、進行していった。その後大きなトラブルもなく、5日間の調整を終え、リオデジャネイロに向かった。

III. ブラジルへ入国

1. 選手村に入村

ブラジルへ入国した後はすぐに選手村に入村することとなるが、選手をはじめとした関係者にはアクレディテーションカードが配布され、このカードが身分証明書の役割を果たし、入国審査を含めとてもスムーズに手続き



写真1 セント・ジョセフ大学の競技場



写真2 選手村の生活棟

が行えた。

大会の運営には多くのボランティアの方が携わっていて、会場間の移動をはじめ、選手もストレスを感じることなく、入村することができた。選手村の部屋は2LDKを4人で使用する形式であった。選手村の生活棟は2～3か国で1棟を使用する形で、参加人数に合わせて使用する棟を割り振られる。(写真2) 参加人数の多い中国やドイツは1棟を丸ごと割り振られていたようである。

2. 現地での調整

今大会は試合会場とは別に練習会場が設けられており、試合会場のオリンピックスタジアムの他にエアフォース大学の競技場が練習会場として用意された。大会期間中はサブトラックが立位の選手と車椅子の選手が入り乱れる形で非常に混雑するので、参加種目の日程の間隔が長い選手はこちらの会場を使用して調整練習を行っていた。

今回の帯同において、最も気を配らなければいけないことの1つに調整練習や試合前のウォーミングアップ中の選手の安全確保があった。

具体的には選手が練習で走るコースに他の国の選手が入り込んでいないか確認したり、走っている最中に横から出てこないように大きな声で周りに注意を促したりするといった方法で、接触による事故が起きないように安

全を確保した(他の国では笛や指笛を使い、注意を促すスタッフもいる)。

混雑した会場での練習・ウォーミングアップでは、接触によって選手が負傷する事態が過去の大会でも何度か起きている。今大会においても試合期間の直前に行われた公式スタート練習で、アメリカの女子選手が、他国の車いすの選手がコースを横切るのを気付かずスタートしてしまい、加速した状態で接触し、足を負傷して担架で運び出されるといったことがあった。

日本代表陸上競技チームではスタッフが周りに注意喚起することにより、選手自身もコース上に誰かいないか確認するなどの安全への意識も高まり、今回の大会では接触で選手が負傷することなく終了できた。

3. 試合期間中

試合会場であるオリンピックスタジアムでは前述の通り、午前と午後のセッションに分かれる2部構成で競技が運営され、熱戦が繰り広げられた。特に男子T42から47クラスの4×100mリレーでは日本パラ陸上初のメダル獲得となった。

障がい者陸上のリレーはバトンを使用せず、次の走者にタッチを行うため選手間の距離が近くなりやすい。また、上肢機能障がいの選手や義足の選手が入り混じった編成となり、それぞれの最高疾走速度やスタートから



写真3 観客の様子

最高疾走速度に達するまでにかかる時間に大きな差が生じるため、バトンパスの調整が難しい。故に今回の男子T42から47クラスの4×100mリレーの決勝においても、1番でゴールしたアメリカチームは第2走者から第3走者へのタッチをテイクオーバーゾーンの手前で行ったとして、レース終了後に失格となった。

観客に関しては、前回大会に帯同したスタッフの話によると、前回大会のロンドンパラリンピックに比べると観客数は少ないようであるが、期間中は連日多くの観客が訪れ、選手への歓声が場内を盛り上げていた。(写真3)

IV. 閉会式

12日間の日程を終え、閉会式がマラカナンスタジアムで行われた。マラカナンスタジアムは約8万人を収容する大規模な競技場で

ある。(写真4)

閉会式では次回の2020年東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、東京をPRするショーなども行われた。閉会式終盤で雨が強まったため、ほとんどの関係者は途中で帰村することとなったが、無事に全日程を終えることができた。また、閉会式の翌日に日本選手団の解団式も現地にて行われた。

そして出国の際と同様に、複数のグループに分かれて帰国した。

V. 終わりに

上述の通り、2020年にはオリンピック・パラリンピックが東京にて開催される。今後、日本国内での障がい者スポーツへの注目度は一層高まっていくだろう。

筆者自身、リオデジャネイロパラリンピックで得た経験をわずかながらでも、2020年



写真4 マラカナンスタジアムの外観

の東京大会に向けての支援活動に還元していければと考えている。

謝辞

今回のリオデジャネイロパラリンピックへの帯同に際しては多くの方のご支援・ご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

文献

IPC (online1) Two to form Independent Paralympic Athletes Team. <https://www.paralympic.org/news/two-form-independent-paralympic-athletes-team>. (参照日 2017年1月14日)

IPC (online2) Rio-2016. <https://www.paralympic.org/rio-2016> (参照日 2017年1月14日)

日本パラリンピック委員会 (online3) リオ2016パラリンピック競技大会 日本代表選手団最終発表について. http://www.jsad.or.jp/paralympic/rio/news/detail/20161005_000919.html (参照日 2017年1月14日)

日本パラ陸上競技連盟 (online 4) IPC Athletics Classification Rules and Regulations 【肢体障がい・日本語翻訳版】 http://jaafd.org/pdf/committee3/c3_2016_ipc-class-manual_jp.pdf (参照日 2017年1月14日)

近藤克之 (2013) IPC 世界陸上競技選手権大会 リヨン大会帯同報告. 陸上競技研究. 95. 43-49

道の駅との連携事業における栄養フィールドの取り組み ～デザートレシピ提案にむけて～

Sano College initiatives in cooperation with the Michinoeki ～ For Dessert Recipe Suggestions ～

野中春奈^{*1} 藤田睦^{*2} 駒場啓子^{*3}
Haruna Nonaka Mutsumi Fujita Keiko Komaba

山崎敬子^{*4} 増山結子^{*5}
Keiko Yamazaki Yuko Mashiyama

Abstract:

Study on original dessert recipe suggestion. 66 recipes were submitted from students.

The 14 recipes were chosen by competition. And, the 14 recipes were developed.

We chose 3 recipes from them, and we decided to serve them for tasting at the Michinoeki.

We collected the response from people who ate those desserts. It was a good opportunity for us to know favors of customers.

キーワード：

地域連携、道の駅、レシピ提案、地産地消

1. はじめに

国土交通省道路局および観光庁は、平成26年11月に、同省が所轄する「道の駅」を活用した地方創生事業として、平成27年度から「道の駅と大学・短大との連携・交流を本格実施する」と発表し、地域の観光資源や魅力を語る人材が集まる「道の駅」を観光振興や地域振興を学ぶ学生の課外活動やインターンシップの場として本格活用する事業を創設した。道の駅を全国規模で対象にした今回の事業は、都市部の学生が地

方の「道の駅」に出向いて交流することなども想定されるなど、新たな価値の創造が期待されている。そこで、佐野短期大学では、国土交通省の学生参加型プロジェクトである「道の駅と地域の大学・短大との連携・企画事業」のうち「連携企画型」事業に取り組むことを決め、佐野市内にある道の駅「どまんなかたぬま」との連携を図る運びとなった。栃木県内の短期大学としては、本学のみが唯一採択され、さらには、平成27年度からの栃木県の新規事業である「大学・

^{*1} 佐野短期大学 総合キャリア教育学科 Sano College Senior Lecturer

^{*2} 佐野短期大学 総合キャリア教育学科 Sano College Associate Professor

^{*3} 佐野短期大学 総合キャリア教育学科 Sano College Associate Professor

^{*4} 佐野短期大学 総合キャリア教育学科 Sano College Teaching Associate

^{*5} 佐野短期大学 総合キャリア教育学科 Sano College Teaching Associate